

更年期症状・障害に対する 大豆由来新規成分「エクオール」の 有用性と食品への応用

Takashi Aso

麻生武志 (東京医科歯科大学 名誉教授)

健康な女性は50歳前後に閉経を迎えるが、この前後10年間の更年期には、卵巣機能の低下と停止のために加齢による身体機能の変化が急速に進行し、また家庭や社会環境の変容への適応に問題が生じることも多く、種々の程度の多彩な症状・障害が好発する。自律神経系機能の失調によるほてり (hot flashes)・発汗・冷え、精神神経系のバランスの乱れによる不眠・うつ気分、膣内の状態の異常による膣乾燥感や性交痛などのために、日常生活に支障を来す女性も少なくない。また脂質や骨の代謝にも将来の高脂血症・心血管疾患や骨粗鬆症・骨折などの発症リスクへ繋がる変化が見られることがある。

このような状況にある更年期女性に対するヘルスケアの基本は、食事や運動などを含む生活習慣の適正化であり、これで十分な対応が出来ない場合には薬物療法が行なわれる。薬物療法の中でホルモン補充療法 (HRT) はEBMとして確立されており有用性は高い。しかし長期治療に伴うリスクが米国で行われた大規模試験で指摘され適応となる症例を慎重に選択するようになり、機能性食品 (大豆イソフラボン、リグナン、ブラックコホッシュ、ザクロなど) による代替医療が注目されることとなり、食品成分による更年期ケアが期待されている。特に大豆中に含まれる大豆イソフラボンは更年期症状および閉経後の障害・疾患に対する代替医療として注目されているが、その効果については一定の見解が得られていないのが現状である。

最近の大豆イソフラボン研究によれば、大豆イソフラボンの生理作用に関与する主な物質はダイゼインの腸内細菌による分解物「エクオール」であることが提唱されているが、日本人の約半数ではエクオールを産生する腸内細菌を持っていないためにエクオールを産生できない状態にあり、また臨床的にもエクオールを産生できる女性の方が、産生できない女性よりも更年期症状が軽かったとの調査報告がある。

そのような背景の中でエクオールを産生する乳酸菌として「ラクトコッカス20-92」株が発見・単離され、この乳酸菌を利用したエクオール供給食品の研究開発が進められていることは、大豆由来の新規成分「エクオール」の食品への応用により、更年期障害諸症状の改善のための新たな選択肢が追加される可能性が期待される。本講演では、更年期女性に対するエクオールの健康ベネフィットについて、これまでの研究報告を紹介するとともに、大豆由来の新規成分「エクオール」の食品への応用についてもその開発の現状を紹介する。

Profile

【略歴】

1965年 京都大学医学部卒業
1973年 スウェーデン・カロリンスカ研究所、生殖内分泌研究施設へ留学
1981年 福井医科大学助教授 (産科婦人科学講座)
1983年 文部省在外研究員 アメリカ合衆国、国立衛生研究所 (NIH) に留学
1988年 東京医科歯科大学教授 (産科婦人科学講座)
2006年 東京医科歯科大学名誉教授

【主な学会活動】

日本産科婦人科学会名誉会員
日本更年期医学会監事 (前理事長1994年度～2005年度)
東京母性衛生学会理事長
Healthy Aging Projects for Women (HAP) 理事長
International Menopause Society第9回国際閉経学会会長 (1999年開催)